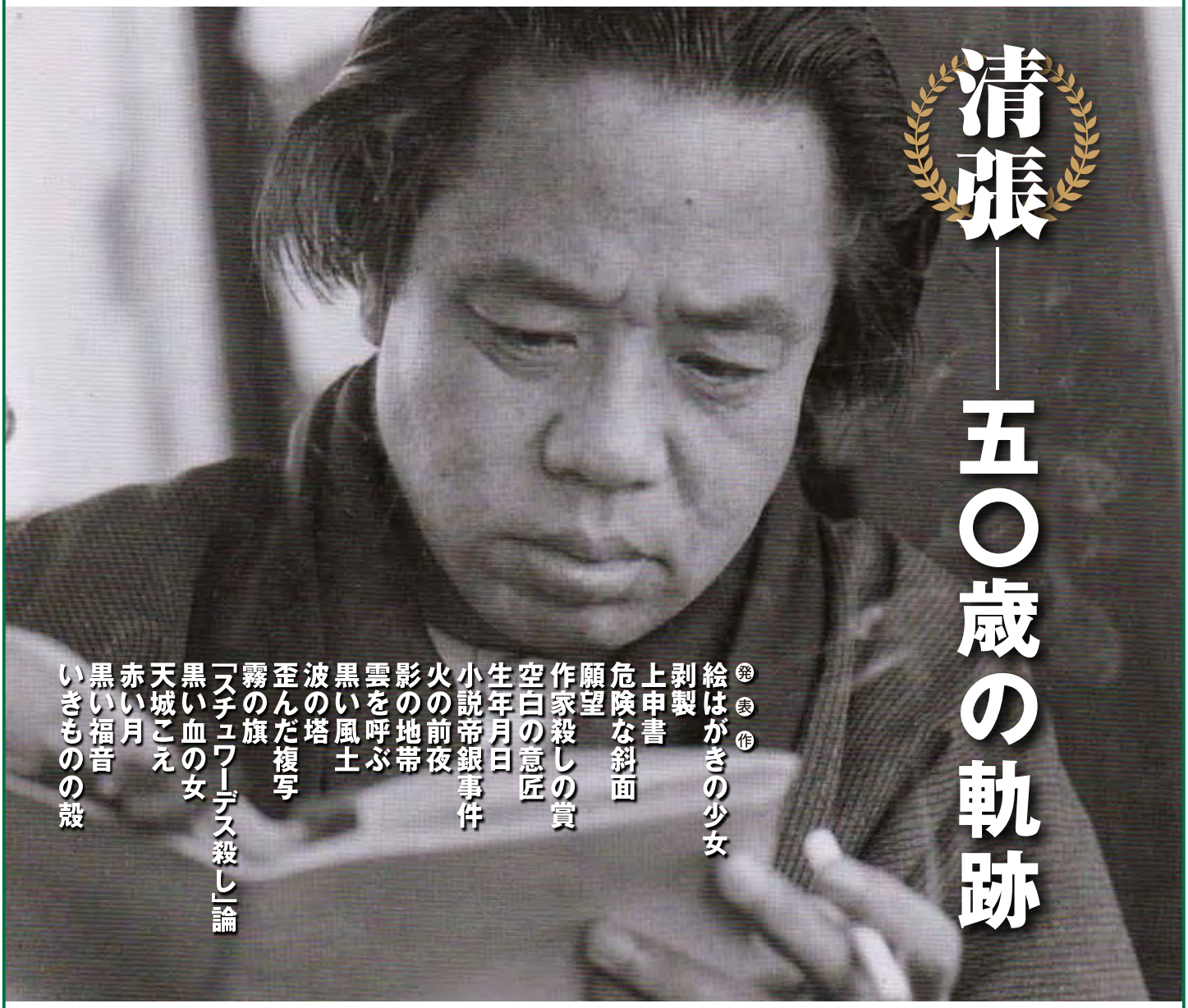
MATSUMOTO SEICHO MEMORIAL MUSEUM

松本清張記念館

◆館報◆
2015.12
第50号



清張――五〇歳の軌跡

発表作
絵はがきの少女
剥製
上申書
危険な斜面
願望
作家殺しの賞
空白の意匠
生年月日
小説帝銀事件
火の前夜
影の地帯
雲を呼ぶ
黒い風土
波の塔
歪んだ複写
霧の旗
「スチュワーデス殺し」論
黒い血の女
天城こえ
赤い月
黒い福音
いきものの殻

Matsumoto Seicho Memorial Museum 創刊50号記念号 Memorial Museum Anniversary50

【松本清張・五〇歳のできごと】

一九五九年（昭和三四年）

執筆量の限界を試してみようと思い、積極的に仕事をする。その結果、この年のなかば以後書痙にかかる。そのために原稿は口述、清書されたものに加筆するという方法をとった。

七月二二日、「小説帝銀事件」により第一六回（昭和三四年上半期）の文藝春秋読者賞を受賞。賞金一〇万円。

一一月二八日、二九日、文藝春秋新社主催の愛読者大会（東京宝塚劇場）において、文士劇「荒神山」に斎宮清五郎の役で初出演。

目次

●松本清張記念館開館17周年記念講演 2
●特別企画展『世界文学と清張文学』… 5
●展示品紹介…… 6
●点描　作品の舞台を訪ねて…… 6
●国際共同研究第3回ワークショップ公開シンポジウム… 7
●友の会活動報告…… 7
●トピックス…… 8

松本清張記念館開館17周年記念講演

「松本清張と邪馬台国」

講師　高島忠平（考古学者）

○日時・平成27年8月2日(日)午後3時
○会場・男女共同参画センター「ムーブ」
○参加者　約三〇〇名

清張さんとの出会い

清張さんとの出会いは昭和50年代の前半くらいでした。佐賀県で、二塚山という、中国の前漢・後漢代の鏡が出土する甕棺墓地が発見され、全国的に反響をよびました。それを見にこられた清張さんに私が説明しました。それから、ほかの遺跡を回ることになり、ご一緒しました。タクシーで通るその道筋やその道の下も遺跡だらけです。清張さんはそのとき、「こういうところに邪馬台国があるんだよなあ」と思わず独り言のようにおっしゃいました。

その後、時々お会いする中で、吉野ヶ里もふくめて「君はどう考えるかね」といろいろ聞かれました。自宅にもお伺いしました。一時間半ぐらい遅刻して、大先生を待たせてしまいましたが、怒られませんでした。出版社の方を応接室に待たせて食事に行ったときにもご自身の考えについて尋ねられました。

私から、「推理小説を書くにはどういう要件が必要ですか?」と聞いたことがあります。「一つは男女関係。もう一つはトリック。三つ目は殺人。この三つが必要だ」と答えられました。「私にも書けるもんでしょうかねえ?」と言うと、「いやあ、君の知っている考古学者が同じことを聞いて書いて、私のところへ送ってくれたが、ほとんどエロ小説だった」とおっしゃいました。「一番自分の作品で気に入っているのはどの作品ですか?」と尋ねましたら、「『風雪断碑』だ」とおっしゃいました。いかに考古学に深く関心を持っておられるかがよく分かりました。

清張と考古学

松本清張は昭和10年代の中頃から後半にかけて大分苦労をしています。このとき気晴らしに、遠賀川流域の遺跡めぐりを随分したようです。豊前・筑後の遺跡にも行っています。若く一番多感な時期に、九州の歴史的風土を歩いたことが、清張さんの歴史観に反映していると思います。清張さんの考古学への関心は森本六爾を知ったことが大きな契機になりました。森本は初めて、日本農業、稲作の始まりを提起した考古学者で、先ほどの「断碑」の主人公のモデルです。

私も遠賀川の中流の飯塚、嘉穂盆地の生まれ育ちであります。高校時代は考古学のクラブに属して、盛んに盗掘をして回っておりました。後で盗掘を取り締まる県のお役人になりましたが、実に楽しかったですね。遺跡に行って、スコップで掘ると、土器が出てくる。ぽんと穴が開くと、中が古墳である。そういうのが勉強より面白く、スポーツ感覚でやっていました。

清張が邪馬台国の謎に挑む視点

千数百年前から続く邪馬台国論争に対して、松本清張は常識、定説、一般的権威に対する絶え間ない疑問と反抗心をもって接します。これが、清張に邪馬台国の論文を書かせた大きな動機、あるいはその視点の一つにもなっていると思います。

二つ目の視点として、「三世紀の中国人の見聞に触れた邪馬台国は女王卑弥呼とともに確かにこの日本列島のどこかに存在したはずである。畿内説をとるにせよ、九州説をとるにせよ、それはこの列島における民族と国家をわれわれの個人が今改めてどのようなものとして構想するかということと分かちがたく結びついているであろう」という視点が挙げられます。清張は『古代史疑』の中で、「実はこの邪馬台国の所在が日本国家成立を推定する大きな鍵になるのである」と言っています。これが、邪馬台国の謎に挑む清張の大きくて深い観点だと思います。

私自身もそういう姿勢で邪馬台国を捉えています。『列島における国家形成をめぐる根幹の問題』です。邪馬台国が今の近畿にあったとすると、三世紀から政治的権力がそのまま継続して七世紀にヤマト王権という古代国家を創り上げたことになるわけです。一方、九州説に立つと、三世紀から七世紀の終わりの間にいろんな勢力が各地に勃興して、国家統一をめぐる戦いがあって、最終的にヤマト政権がイニシアティブをにぎる、そして律令国家を創るとなるわけです。このように日本の国家の性格や内容にまで及んでくるわけです。

清張の考える邪馬台国論争の魅力

邪馬台国については、『魏志倭人伝』という二千文字の歴史書の中で、誰にでも論点が明瞭に理解できるところに魅力がある。「未解決の問題が大部分で推理的な想像ができる。誰でも自由に論争に参加できる。謎は永遠に解決しそうにもない。邪馬台国問題は将来の人の楽しみに残す。」このように清張は邪馬台国問題に関して決め付けようとはしない。これは、清張さんが邪馬台国の研究者だからです。ここだと断定してしまう研究者を僕は欺瞞に思いま

す。私は九州説ですが、日本古代史の流れを理解するのに合理的です。

決定的な証拠として、封泥（ふうでい）という粘土の塊が出てくれば、決まりだという見方が最近増えてきました。中国の皇帝から卑弥呼に贈られた文書や贈り物を梱包した紐の結び目を、封泥という粘土で押えるわけです。そこに、皇帝璽印という印鑑が押され、印刻が残る。これは卑弥呼本人の前でしか解くことができないのです。中国でも二千個以上、朝鮮半島のピョンヤン附近でも千個くらい、実は見つかっております。

松本清張『古代史疑』

松本清張の邪馬台国論はやはり、この『古代史疑』ですね。私は学生時代に買いましたが、当時は、推理小説作家がまともに書くはずがないと思われていました。が、読んでみると、つくづく立派な研究者の論文です。

最初に、「学説史」があります。これは必ず研究者がやらねばならないことですが、清張はちゃんとしています。『日本書紀』に、神功皇后を卑弥呼と考えて、『倭人伝』のその部分を引用したところがあります。ですから、もう一三〇〇年前から邪馬台国論争は始まっているわけです。まずそのことを踏まえて、その後、室町時代の北畠親房とか、江戸時代の新井白石とか本居宣長とか、その邪馬台国に関する著作をしっかりと読まれて整理し、評価もされています。特に本居宣長は丹念に読んでおられて、時代的な思想の背景も鋭く指摘されています。明治時代になっても、内藤虎次郎（湖南）とか、九州説・近畿説の学説をしっかりと調査し、自分なりに分析されています。邪馬台国論では松本清張は学者であり、研究者であったと言えます。

松本清張の「一大率」

清張は「一大率」は「女王国以北に派遣された帯方郡からの軍政官」であると言います。古代史の研究者の多くは、「一大率は邪馬台国が派遣した官、身分、役人だろう」と言って、これを否定します。「王は使いを出し、京都、帯方、諸韓国、及び郡に倭国使、皆津に臨みて捜露し、伝送文書賜物女王に詣り、差錯を得ず」つまり津で、一定の場所で、送られてきた物を点検して、間違いがないように女王に送ることをしている、と書かれています。そして、「国々に市有り、有無を交易し、大倭をして之を監せしむ」各国に公的な市場があり、そこで交易を行なっている。そして、「女王国より以北に特に一大率を置いて諸国を検察、諸国畏憚す、中国の刺史の如し」となります。清張はその一大率を帯方郡からの軍政官で、北部九州沿岸部の国々を監視、統括していたと見ています。新しい衝撃的な見解です。

一大率・女王国以北、高島説

対して私は、一大率は女王国連合政権が配置した総領事的存在と見ています。「対馬・一支・末盧・伊都・奴・不弥を含めた沿岸諸国を対象」にした総領事的存在です。「津に臨みて捜露し」とは、中国や韓国との朝貢交易で入ってくる物品を伊都国にある津、港で点検するわけです。管理し、勝手に交易をさせない。そういう公貿易やその地域の勢力を統括、総領するために、一大率は置かれたと見るべきだと思います。この辺は清張さんの考え方と違います。

というのは、邪馬台国時代の三世紀の卑弥呼連合のような小国連合はすでに紀元一世紀くらいから認めることができます。もう少しさかのぼると、紀元前一世紀に、『漢書』の地理志の中に「楽浪海中に倭人あり。分かれて百余国」や、「朝献する者あり」などと書かれております。これは、そのころ北部九州に成立してきた国の首長たちが、中国に行って朝貢貿易を行なう状況を書いている。

そして、紀元一世紀に皆さんもご存じの志賀島の金印、その後、紀元百七年、倭国王帥升の中国との朝貢関係が『後漢書』に記されています。そして、紀元三世紀の前半の卑弥呼の中国への朝貢と、そのあり方を見ていくと、どうも僕には奴国一国というよりも、奴国を中心とした連合政権が中国に使者を送っていると考えられる。連合政権の、政権としての成長を見ることができます。

清張の結論①

邪馬台国がいずこに在るかという疑問に対しては、これを九州説とするのに賛成し、卑弥呼については、これを邪馬台国の巫女とする説をとり、あえて、土酋（どしゅう）とか、あるいは大和朝廷の誰かに比定する必要を認めない、と清張さんは書かれています。

ここで「国」成立の状況を改めて見てみたいと思います。『魏志倭人伝』には、末盧国、伊都国、奴国、不弥国とか邪馬台国とかいろんな国々が出てきます。現在の郡くらいの大きさ、領域です。国の実態は北部九州の国々の存在から初めて解明ができます。倭人は女王国三十国と狗奴国連合、および女王国の東の海の向こうの国々の三つのグループがある、と記されています。その倭人全体を統一した政権の存在は書いてありません。ただ三十国を統括する政権はあるとは書いてあります。環濠集落の分布範囲（北海道・東北・沖縄を除く地域）は、奇妙に後の律令国家の成立範囲と重複してきます。二百以上の国があり、北部九州には四十くらいの国がある。つまり、女王国三十国は北部九州で充分まかなえるということです。

吉野ヶ里の「国」は現在の郡くらいの範囲です。それをもう少し拡大した範囲に、吉野ヶ里の衛星的な集落があります。さらにその周りにそれの衛星的な集落があって、それらが一つの全体としてまとまりを持っています。氏族が政治的に結合したものが当時の国です。邪馬台国は女王を中心に氏族をまとめて国を作っており、その周りに伊都国、奴国などがあるわけです。そして、相対立する狗奴国がある。似たような構造が吉野ヶ里を中心にしても見て取れる。発掘担当者の七田忠昭さんは、邪馬台国を吉野ヶ里を対象にしてイメージし、吉野ヶ里が邪馬台国だと強く主張しています。

清張さんは「卑弥呼については、これを邪馬台国の巫女とする説」をとると言っていますが、巫

女王・卑弥呼は北部九州でしか成立しないと私は見ています。卑弥呼は、優れた霊能力をもつ巫女（シャーマン）であったため、三十国に共立された。祖先の神々（祖霊神）から、託宣を受けてそれを伝える。実際には、社会現象やこれからの行動についてよく見通したお告げを告げるわけです。おそらく卑弥呼は国際情勢や、中国や朝鮮半島や日本国内のいろいろな情報の収集に、優れた力を持っていた人物だろう。その情報を使って託宣を下す。では、どこにいると、情報が一番入るか、それは北部九州の沿岸、特に伊都国ではないかと私は思っています。

北部九州では、紀元前二世紀から巫女が社会的政治的地位を高めていく過程が、墳墓の変遷から読みとれます。三〇〇〇年ぐらい前の縄文時代にも巫女さんがいます。土偶です。弥生時代後半には卓越した巫女が出現しております。これは紀元前一世紀前半のお墓です。貝の腕輪をたくさん装着した女性の人骨であります。それより前の巫女さんは一般の墓に入っていますが、この時期になると、身分の高い人たちのグループの中に墓があります。

ところが、紀元前一世紀の終わりから紀元一世紀の初めにかけては、一つの国を実務的な権威を持った男性の支配者と、信仰上の聖的な権威を持った女性の支配者で、統括する時代になっているようです。私は二重政体と呼んでいます。これは僕が学生時代に発掘した飯塚市の立岩遺跡です。この甕棺には、中国の鏡が六面、朝鮮系の青銅の矛、中国系の鉄剣がありました。この墓はどうも男子のようです。それから、頭飾りに小さい手鏡と小刀を持った人物の墓がありました。これはどうも女性のようです。紀元前一世紀の終わりごろです。男性の実務的支配者と女性の聖的支配者による二重政体です。

こういう例は糸島市の三雲南小路にも見ることができます。そして、邪馬台国時代になるわけです。縄文時代からいる巫女さんが社会的地位を高めていって、三世紀には多くの国々を統括できる権威を持つ巫女王が出現します。九州ではそういう発展過程を読みとることができます。そういう巫女だからこそ、松本清張は三十国の女王として共立されたのだと書かれていますが、まさに最近の研究はそれを示しております。

清張の結論②

卑弥呼の塚は必ずしも高塚とは思われないから、高塚の出現地である古代大和でなければならぬという理由はない。卑弥呼の宮室、楼観、城柵とともに、その径百余歩の冢（つか）も中国の風俗を写した陳寿の創作である。里程や戸数の記載は、虚妄の数字である、と清張さんは言われています。

最近は、卑弥呼の墓は奈良県桜井市にある箸墓と呼ばれる、全長が二五〇メートルの巨大な前方後円墳だとよく言われます。「径百余歩」を、今でいうと百四十から五〇メートルです。ですから、卑弥呼の墓は直径が百四十から五〇メートルのお墓になります。この数字は、僕も一つイメージを書いたと考えています。清張と同じです。『後漢書』に、後漢時代の皇帝の墓の大きさが書かれていますが、ほとんどが「百余歩」か、それより大きいかです。卑弥呼が遣いを送る魏の時代には、皇帝は高塚を作っていません。地下墓です。陳寿が『魏志倭人伝』を書いたときの理想社会は後漢の時代で、その理想のイメージがここに「百余歩」として表わされていると、私は見ています。

ただ清張さんは、卑弥呼の「宮室、楼閣、城柵」はあやしい、吉野ヶ里の物見櫓とか城柵とかは陳寿のイリュージョンであると書かれています。それは違うと僕は思います。近畿の唐古鍵遺跡から、楼観のようなものを描いた土器が出てきています。ですから、中国人が見て楼観のような構造のものが日本にあったとは、言っていいと思います。城柵は土塁に柵を立てたものです。近畿の集落には土塁はありません。柵もはっきりしない。ですから、中国人が城柵として書いたとすれば、九州の環濠集落しか考えられません。

卑弥呼の墓があれば、そこが邪馬台国だとよく言われますが、私には不思議でなりません。卑弥呼の墓が邪馬台国にあるとはどこにも書かれていません。女王卑弥呼はどこの国出身か不明です。卑弥呼は出自の国で葬られております。この時期はそうです。そういう意味では、邪馬台国にある確率は三十分の一です。どの国にも三十分の一の確率で墓がある可能性がある。先ほど申上げたように巫女は情報通じゃないといかん。国際的情報が一番集るところはどこかというと、やっぱり公式の津（港）のある伊都国、そこの出身である可能性が私は高いと見ております。

すると、亡くなると出身地の伊都国に帰って埋葬されたと考えられます。で、時期的にも合いそうな、糸島市の平原1号墳が卑弥呼の墓であっても構わない、と言っております。卑弥呼の墓だとは言っておりません。この古墳の被葬者は、出てくる鏡とか、鏡の埋葬の仕方、被葬者の埋葬の仕方などを考えると、かなり強大な霊力を持っていた人のようです。鏡を割ってその霊力をお墓に封じ込める。割れた鏡は「破鏡」と言いますが、これは中国では元に返らないという意味を持っています。平原1号墳は、四十枚の「破鏡」を棺の周りに置いております。棺の中には入れておりません。それだけ多量の鏡でなければ、この人物の霊力を、蘇りを封じ込められない。そういうふうに見るべきだろうと思います。北部九州では、ほとんどが一枚の鏡ですが、弥生時代の後期の、紀元前一世紀から三世紀にかけての、破鏡で封じ込められたお墓がもう三十例ほど発見されております。他の地域では発見されておりません。

結び　邪馬台国は見えてきた

邪馬台国は吉野ヶ里の物見櫓から見えるところにある。これは私の言っていることです。中国都城様式の影響を強く受けている、弥生時代後期の巨大環濠集落が筑紫平野にはたくさんあります。中国都城の、角楼、甕城（おうじょう）などを真似て城郭を作っている。政治・経済的戦略物資である鉄の流通の中心が九州である。巫女王出現の歴史的過程が明らかな地域である。それから、「国々」の存在が現在の地域と対応できる。こういうところが一番、邪馬台国の所在地がイメージできるところではないかと見ております。しかし、九州のどこかは私にも分かりませんし、清張さんも謎のままにしたいと言っております。

特別企画展

セカイブンガクとセイチョウブンガク

世界文学と清張文学

Seicho Meets World Literature

開催期間：平成28年1月16日（土）～3月31日（木）
会　　場：記念館地階「企画展示室」
入 場 料：一般500円/中高生300円/小学生200円
常設展示観覧料に含む

松本清張という作家を育んだもの、清張が志向した文学、その背景には、日本文学が近代化する過程において受肉した、豊かな「世界文学」がありました。

多くの読者に支持され国民作家と言われた清張は、日本語で、日本国民に向けて作品を書いたでしょう。しかし、どこかで、世界に向けて書いていた気配もあります。

日本語で書かれた文学作品が、世界で読まれる機会は決して多いとは言えませんが、それでも清張作品は多数の言語に翻訳され海外出版されてきました。普段あまり見ることのないこれらの出版物を、新たな作品との出会いとして眺めてみませんか。

1987年 フランス・リヨン駅

世界文学と清張文学

1 清張が出逢った世界文学

『世界文学全集』第二期第11巻
『ブッデンブロオク一家（1）』
トオマス・マン著 1932（昭和7）年
新潮社（北九州市立中央図書館所蔵）

『支那古代社會史論』
郭沫若著 1931（昭和6）年 内外社
（清張旧蔵）

2 清張作品に見る世界文学

『エドガア・アラン・ポオ全集』
谷崎精二訳 1969～70（昭和44～45）年 春秋社
（清張旧蔵）

「文藝春秋漫画読本」
1964（昭和39）年10月号
松本清張自筆のイラスト。

「黒の回廊」原稿

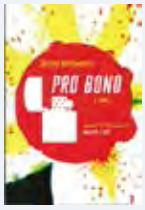
3 世界を視野に

「ヨーロッパの点と線」
1987年11月19日「週刊文春」フランス・グルノーブルで開催された「世界推理作家会議」（第9回 国際推理小説・映画会議）※に、日本から初めて松本清張が招待された。
※FestvalInternational du Roman et du Film Noir

「松本文学はドストエフスキー＋ポー」
1991年10月3日「週刊文春」作家・作詞家の新井満は、清張との対談で「松本さんの作品の社会派リアリズムの方はドストエフスキー。詩情の方は、やはりポーだろうな」と評した。

4 世界で読まれる清張文学

フランス語訳
『聞かなかった場所』
Rose-Marie Makino／Yukari Kometani 訳
2010年 Actes Sud
（パリ）



英語訳
『霧の旗』
Andrew Clare訳
2012年 Vertical
（ニューヨーク）

中国語訳
『神々の乱心 上』
王華懋訳 2013年
独步文化出版（台北）

スペイン語訳
『点と線』
Marina Bornas訳
2014年 Libros del Asteroide
（バルセロナ）

韓国語訳
『黒い手帖』
ナムグン ガユン訳
2014年
BOOKSPHERE PUBLSHING HOUSE

「JAPAN' S "UNKNOWN" WRITERS The Top Seller. SEICHO MATSUMOTO」1977年10月17日「Newsweek」

『世界文学全集』第22巻『罪と罰』

常設展示の『世界文学全集』については、かつて館報一二号でも「円本」としてご紹介したことがある。今回は、特に清張が愛読した『罪と罰』に焦点をあててみたい。

清張が『世界の文学』第一六巻付録（昭和三八年　中央公論社）に寄せた、「『罪と罰』を読んだころ」という文章がある。『世界文学全集』の月報に心惹かれたエピソードを披露し、〈本全集の付録にすすんで一文書く気になった〉のだという。

この文章には、清張らしい指摘が随所に見られて興味深い。たとえば〈ドストエフスキイを読んだことがその直後にくるプロレタリア文学をどのくらい容易にうけ入れさせたか分からない〉、〈ラスコーリニコフの非凡人哲学は、ニーチェの超人主義に通じるものがあり、そのころ、ニーチェの思想を生田長江だかの解説書で読んでいた私にはこれも感銘したものだった〉などは、清張の読書体験に基づくものではあるが、当時の文学・思想の潮流がうかがい知れておもしろい。また、〈『罪と罰』は本格的な思想小説だが、その手法から推理小説に多くの示唆を与えている。現に、江戸川乱歩の出世作『心理試験』は、これがなかったら成立しなかったであろうくらいの影響を強くうけたものであった。『殺意』をはじめ、いわゆる倒叙推理小説に比較的多く文学性が見られるのは、やはり、『罪と罰』の影響ではないかと思われる〉などは、清張の面目躍如たる箇所だろう。

清張は、ドストエフスキイの『罪と罰』のことを〈この小説はわが青春のころの愛読書の随一であった〉と書いている。〈小さな活字のぎっしり詰まった昇曙夢訳でもよんだし、スマートな活字となった米川正夫訳でもよんだ〉――むむ？ここまで読んで私は引っかかった。書き出しからの流れでは、新潮社版『世界文学全集』の二二巻で『罪と罰』を読んだ、となるのが自然だが、それなら中村白葉訳でなくてはならない。その辺は曖昧になっている。「『罪と罰』を読んだころ」という題なのだから、別にいいのだが……

社会派と呼ばれた清張の推理小説は、動機を重視したものだった。新井満との対談※で清張は、『罪と罰』にある殺人の「動機」を大切にすれば〈推理小説も近代小説のレベルになるんじゃないか〉と考えたことを語っている。

ドストエフスキイの影響は、かくも深い。清張文学が目指した高みを、改めて感じた。

（専門学芸員　柳原暁子）

※「松本文学はドストエフスキー＋ポー」（「週刊文春」一九九一年一〇月三日）

点描　作品の舞台を訪ねて

「夏島」―明治史余滴①『西哲夢物語』

現行憲法の施行から六八年。昨今、改憲という言葉をよく耳にするが、さて、我が国の憲法創生期、〈明治〉とは、いったいどんな時代だったのか。様々な地盤で胎動がある中、〈憲法をはじめとする法制度の整備は、日本が近代国家であることを列強に認めさせ、不平等条約改正を実現するための大前提だった〉（※1）と解されている。憲法制定にまつわる騒動を描いた短篇「夏島」（昭和五〇年六月、「別冊文藝春秋」）は、清張六五歳のときの作。夏島（神奈川県横須賀市）を訪ねた〈わたし〉が迫った、或る〈謎〉とは――。

明治二〇年五月末より、伊藤博文は、伊東巳代治、井上毅、金子堅太郎と神奈川県金沢八景の旅館に籠り憲法草案の検討に専念していた。ある夜盗賊が入り、草案関係書類が入った井上の鞄が盗まれる。翌朝、書類は残されたまま鞄が畑に捨てられているのが見つかった。機密漏洩防止のため金沢対岸の孤島、夏島に建築したばかりの伊藤の別荘に移り、いわゆる夏島憲法とよばれる草案を作成。二一年六月から枢密院で審議に入る。ところが前年秋頃から『西哲夢物語』という小冊子が非合法に出版、配布され、その内容は作成されたばかりの夏島憲法に酷似していた。主謀者は旧自由党員の星亨（ほしとおる）。星がどこかから草案を入手し、数人の手を経て出版されたことまではわかった。では一体、誰が星に草案を渡したのか。

明治憲法起草遺跡記念碑（神奈川県横須賀市夏島町）

わたしは、これは〇〇（※2。筆者注）が草稿（中略）の写しを、政敵だが仲のよい星亨にひそかに与えたのであろうと推理したことがある（拙作「夏島」）。というのは、憲法を予定日の二十二年二月十一日（紀元節）に発布すれば、その欽定憲法の内容が内容だけに民権論者に強烈な衝撃を与え、それからまたどんな反対運動が起って騒動になるかもしれないことを〇〇が心配して、その事前に、非合法出版というかっこうにしてだいたいの内容を皆にそれとなく予告した、と思うのである。つまり憲法発布の衝撃をやわらげるために、事前に内容の大体を民権運動家らに知らしめ、もって憲法を軟着陸させる手段としたのではあるまいか。

（文春文庫「史観宰相論」より）

未読の方のため、せめて共謀者の名前だけでも伏させていただく。問題の書『西哲夢物語』は、清張の書庫に残されていた。「夏島」で〈わたし〉が昭和四九年に〈九万八千円で〉買ったという〈珍稀本〉の体裁どおり。さらに、作品の記述に違わず、昭和三五年の新聞切抜きまで挟みこまれているではないか！謎につつまれた古書から、思索に耽る清張の姿が立ち昇る。次号へ続く。

（※1）『民権と憲法　シリーズ日本近現代史②』牧原憲夫著、二〇〇六年、岩波新書
（※2）作品には清張が推理した共謀者の名前が書かれているが、ここでは敢えて伏字とした。

（加地尚子）

「現代東アジア文学史の国際共同研究」第３回ワークショップ公開シンポジウム

2015 年 8 月 22 日（土）～ 23 日（日）開催

第３回ワークショップの研究メンバー

藤井教授 基調講演

北橋市長あいさつ

内　容

基調講演 藤井省三（東京大学大学院教授）『夏目漱石と魯迅：「夜の支那人」事件から「阿Q正伝」まで』

報告① 林敏潔（中国・南京師範大学教授）『魯迅と女性作家蕭紅――霍建起監督『蕭紅』と許鞍華（アン・ホイ）監督『黄金時代』の比較研究』

報告② 南　富鎮（日本・静岡大学教授）『東アジア文学史の比較文化的なアプローチ――ル・ボン、魯迅、李光洙、本間久雄、木村毅、松本清張など』

報告③ 陳　國偉（台湾・中興大学副教授）『作為歴史替代的想像装置：「清張之後」的台灣推理小說』

報告④ 柳原暁子（日本・松本清張記念館専門学芸員）『消えた男をめぐって――松本清張「駅路」と村上春樹「どこであれそれが見つかりそうな場所で」を比較する』

報告⑤ Kleeman Faye（アメリカ・コロラド大学教授）『文字から映像へ――村上春樹の原作映画について』

報告⑥ 張　明敏（台湾・健行科技大学助理教授）『台湾における三浦綾子の受容と変容』

報告⑦ 張　文薫（台湾・台湾大学副教授）『戦後台湾文壇のメカニズム』

報告⑧ 星野幸代（日本・名古屋大学教授）『小説テクストから舞踊言語へ――台湾コンテンポラリー・ダンスの伝播』

報告⑨ 金　良守（韓国・東国大学教授）『1970 年代韓國的 ‘民族文學’ 和臺灣的 ‘鄉土文學’ 之比較：黃皙暎・黃春明的小說及其影像化』

座長・コメンテーター 島村　輝（フェリス女学院大学教授）
秋吉　收（九州大学准教授）

通訳・コメンテーター 徐　子怡（東京大学大学院博士課程）

友の会　活動報告

● 平成 27 年度年次総会・懇親会

8 月 2 日（日）　参加者 47 名
総　会：記念館 企画展示室
懇親会：小倉リーセントホテル

高島忠平氏による講演会の後、平成 27 年度友の会年次総会を開催しました。前年度の事業報告及び決算、幹事選任、新年度の事業計画及び予算等の審議が行われ、拍手をもって承認されました。懇親会は、総会終了後に会場を小倉リーセントホテルに移して行いました。高島忠平氏も特別参加され、和やかな懇親会となりました。この日は、北九州市の夏の祭典「わっしょい百万夏まつり」の最終日でもあり、懇親会場近くから打ち上げられた花火が大輪の花となって夜空を彩りました。

● 清張サロン

平成 27 年度の第 1 回清張サロンは、特別企画展「清張と戦争」の関連作品である「遠い接近」のドラマを鑑賞した後、企画展を見学しました。第 2 回は、特別講演会として市民の方にも参加を呼びかけ、「遭難」をテーマに講師にお話いただきました。地図や音声・映像を使って分かりやすく学ぶことができ、大変有意義な清張サロンとなりました。

第 1 回　9 月 25 日（金）14：00 ～ 16：00　　参加者 23 名
・テーマ　　ドラマ鑑賞「遠い接近」・企画展見学
・解　説　　加地尚子氏（記念館・企画係長）
第 2 回　10 月 24 日（土）14：00 ～ 16：00　　参加者 62 名
・テーマ　　『黒い画集 1』「遭難」を読む・聞く・観る
・講　師　　加島巧氏（長崎外国語大学教授）

● 関門文学散歩

11 月 5 日（木）　参加者 43 名
訪問先：林芙美子記念室、和布刈神社、赤間神宮、みもすそ川公園、乃木神社など

今回は、清張ゆかりの地として北九州市門司区と下関市を訪ねました。絶好の行楽日和で、関門海峡が美しく輝いていました。門司区では、今年 2 月にリニューアルした「林芙美子記念室」と『時間の習俗』の文学碑がある「和布刈神社」に立ち寄りました。関門トンネルを通って到着した下関市は、清張が 1 歳から 7 歳まで過ごした土地で、『半生の記』や『骨壷の風景』などに当時の情景が描かれています。壇ノ浦周辺の「赤間神宮」や清張文学碑がある「みもすそ川公園」などを見学し、城下町長府を散策しました。『半生の記』には「乃木神社の祭りはかなり強い記憶になっている」と記されています。歩く距離は長かったのですが、気持ちの良い散策が楽しめました。今回も参加者の皆様から「良かった」「次回も楽しみ」といった声をいただきました。

友の会会員　更新のお知らせと新規会員募集

松本清張記念館友の会は 8 月1日～翌年7月31 日を 1 年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、『友の会だより』の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は 3,000 円です。皆様のご入会を心よりお待ちしています。

友の会入会のお申し込みは TEL.093-582-2761
北九州市立松本清張記念館 友の会事務局まで

入館者 130万人達成！

平成 27 年11月23日、記念館の入館者が 130 万人に達しました。

130万人目の入館者は東京都にお住まいの古川友夫さん。奥様とご一緒にはじめて来館されたとのことでした。館長から、入館130万人目の認定証と記念品が贈られました。

『松本清張研究』販売のお知らせ

「松本清張研究」（年１回発行）の最新号は、本年３月に刊行した第 16 号「特集 清張と新聞」です。創刊号から最新号まで、館内ミュージアムショップのほか、北九州市および東京都の取り扱い書店や通信販売でもご購入いただけます。

詳しい内容は、当館ホームページをご覧ください。

出前講演に行ってきました！

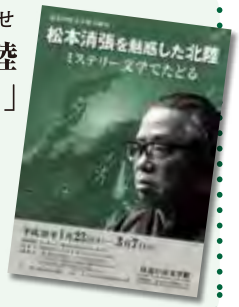
開催日　11 月 29 日（日）嘉麻市立図書館主催
会　場　嘉麻市織田廣喜美術館
演　題　「松本清張と筑豊」
参加者　一般の方　約 40 名
講　師　当館学芸担当 中川主査

筑豊の登場する作品「火の記憶」「真贋の森」などを紹介。

「高志の国文学館」企画展開催のお知らせ

「松本清張を魅惑した北陸 ――ミステリー文学でたどる」

会　場　高志の国文学館
富山県富山市舟橋町 2-22
TEL.076-431-5492
会　期　平成 28 年 1 月 23 日（土）～３月７日（月）
休館日　火曜日・2月12日（金）



第17回 松本清張研究奨励事業 入選企画決定

赤塚　隆二氏

吉村　法子氏

「松本清張研究奨励事業」は 17 回目を迎えました。選考委員会による厳正な審査の結果、次の２点の研究企画が入選と決まりました。鉄道に見る作品世界の広がりや列車・駅の文学的効果を〈乗り鉄〉論的に探る意欲的な研究と、清張社会派推理小説のイタリアにおける影響の解明を目指す斬新な研究で、共に成果が期待されます。

研究奨励事業入選者

【企画名】作品中の鉄道乗車記録詳細と文学的効果の考察
――清張世界への乗り鉄論的アプローチ
【入選者】赤塚　隆二　元朝日新聞西部本社記者

【企画名】イタリア社会派推理小説の成立における松本清張作品の受容――「霧の会議」とレオナルド・シャーシャ
【入選者】吉村　法子　立命館大学大学院博士課程

第18回 松本清張研究奨励事業募集

■対　象

①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）

上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体も可。

■内　容

入選者（団体）に120万円を上限とする研究奨励金を支給します。

■応募方法

今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料（すべて様式は自由、ただし日本語）を、**平成28年3月31日までに応募してください。**

※詳しくは、ホームページをご覧になるか、記念館までお問い合わせください。

編集後記

戦後70年の節目の年が終わろうとしています。特別企画展（「眩人」、「清張と戦争」）、現代東アジア文学史の国際共同研究・公開シンポジウム等、今年も多くの皆様にご来館いただきまして、有難うございました。開館 18 年目となる来年も、これまでにない新たな切り口で清張と作品世界の魅力を紹介します。どうぞご期待ください。　（N.K）

編集・発行
松本清張記念館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL093-582-2761
FAX093-562-2303
http://www.kid.ne.jp/seicho

イラスト・山藤章二

開館時間：午前9時30分 ― 午後6時［入館は午後5時30分まで］
休 館 日：年末（12月29日～31日）
観覧料：一般500円［400円］・中高生300円［240円］・
小学生200円［160円］［ ］内は30名以上の団体料金
○JR小倉駅より徒歩15分・西小倉駅より徒歩5分
○バスは《小倉城・松本清張記念館前》下車
○車は北九州都市高速、大手町ランプより5分